

りになつたが、じつと堪えてそのまま行くと貝塚があつた。これはどれほど前のものかは私には解らぬが、大昔霞ヶ浦を生活の糧とし、この水を飲み、魚を採つたりしていた人たちがいたということに、極めてあたりまえのことではあるが深い感動を覚えた。時代が幾千年か経て人間の叡知や文明を誇るようになったこの時代に霞ヶ浦は反比例して「死の湖」と化していくのはどういふことなのだろう。

こんな疑問を持ちながら目的の場所に着いた。霞ヶ浦浄化の運動をしている漁民の方三人が集つていてくれた。三月とはいえ、みぞれの降り出しそうな日で、私たちは着くとすぐコタツに入れてもちつた。どこから話をもつていったものかと迷つていたら、漁民の方たちが最初から高い調子で話しはじめた。

「昔は霞ヶ浦の水ほど美味しい水はなかつた。御飯にかけて食べたりのものだが、去年あたりから急激にドブみたいになつた。」

「われわれは、霞ヶ浦を河と呼んでいたんだ。流れがあるから河というが水門を閉じ、流れがなくなつたものは絶対河とはいえないと思つている。」

「われわれが学校を卒業して漁を始めて以来、去年以上に濁水になつたこともあるが、去年のような被害を受け

たことはない……。」

そして私たちに対してこうもいった。

「われわれ漁民よりは、霞ヶ浦の水を飲んでいる人の方がもつと重要な問題だと思ふ。われわれは漁が出来なければ、スコップをもつても生きていけるが、霞ヶ浦の水を飲んでいる人は、この水を飲まなければ生きていられないのだから……。魚が飲んで死んでしまふような水を人間が飲んでいいわけがないじゃないか。」

と。そして、
「この水を利用してゐる人たちが、われわれ漁民と手を組んで、県に陳情にいたり、国会にも陳情に行き、霞ヶ浦をもとの状態にもどすまでに運動してほしい……。」

等々訴えるというよりは叫びにも近いものだった。
行く時は、出島というはじめての土地の楽しさにひかれ、車外の様子をキョロキョロ見まわしていた私も、インタビュールした時の漁民の声が熱っぽく耳に残り、いま私のなすべきはなになのかと自問しつづつ気がついたら黄昏どきの土浦であつた。

霞ヶ浦の水をめぐつて、漁民の声、大学の先生、県知事、さらに私の身近かな人々の声など聞いて回つて、私はあることに気がついた。

霞ヶ浦の水を生活水としてゐるわれわれ、漁民、さら